

唐津藩歴代藩主の移り変りとその政治④

～土井時代～

■土井時代 4代72年

初代 土井周防(すおうの)守(かみ)利益(とします)

2代 大炊頭(おおいのかみ)利(とし)実(ざね)

3代 大炊頭利(とし)延(のぶ)

4代 大炊頭利里(としざと)

石高7万石

土井周防守利益は、元禄4年(1691)志摩の鳥羽城主から唐津城主となった。

土井時代に特筆すべき事は、郷村に民間塾の伝統が築かれたことである。唐津藩の民間塾の始祖は吉武法命。彼は奥東江や三宅尚齋を師として学ぶ。「奥流の学」と称された奥東江の学風は、幕府が封建教学として用いた朱子学よりもむしろ実学を重視、知行合一を唱える陽明学に近かった。法命は47才で隠居、村々の庄屋宅に7つの塾を設け、76才で生涯を終えるまでその塾をまわり講義を行った。法命の教えは、ただ儒書を読み講義をするだけでなく、互いに討論しあって批判力を高め、学び得たものを実践することに重きを置いた。塾で学んだ若者の内、やがて村の庄屋になる者が次々に現れ、彼らもまた「奥流の学」を受け継ぎ塾を開き村の子弟の教育にあたった。幕末に至る120年余の間に、村々で開かれた民間塾の数は30を越えている。

2代大炊頭利実の時、盈科堂と呼ばれた藩校が開校した。場所は唐津城二の丸、旧唐津東高校の運動場辺りである。利実在任中の享保17年(1732)、西南日本を中心にうんかの害による不作が続き、唐津藩でも約4,500人の餓死者がでた。無量軒・浄泰寺・鏡村等で粥の炊き出しをしている。

3代大炊頭利延は、元文元年(1736)14才で唐津藩主となったが、実際の政治は家老の土井内蔵丞(くらのすけ)が行う。延享元年(1744)内蔵丞が急死すると、後を追うように利延も22才の若さで病死。『旧記抜粹 打上組』には、殿様の墓所が神田の愛宕山に決まると「御山御普請御用人足」として1,200人の農民が墓所づくりにあたった。葬儀の日は、大庄屋・小庄屋は浄泰寺前で見送ったと記している。墓石は和多田の先石から切りだし「御石碑人足」として1,000人の農民が動員され2年がかりで完成した。延享2年(1745)、4代大炊頭利里(としざと)の入部の時、「砂子の席論」と呼ばれる紛争が起きた。藩主の参勤交代などの時、町方・村方を代表して町年寄・大庄屋が藩境の砂子まで出かけて出迎えていた。これまでは、大庄屋が町年寄より上席に座って出迎えていたが、利里の時は藩の役人が、町年寄を大庄屋より上席に座らせたので大庄屋達が騒ぎ立てた。結果はこれまでの慣例どおりになったが、煽動した廉で数名の庄屋が退役することとなった。宝暦12年(1762)9月、下総国古河へ転封の命がくだり、翌年5月、利里は唐津城を水野氏へ引き継ぎ唐津を跡にした。

分野

歴史

◎地図・写真・統計資料など



市指定 土井大炊頭利延墓園
唐津市和多田(御山)
指定年月日:昭和58年7月24日

(『唐津市の文化財』より)

◎引用・参考文献(出典)

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話: 0955-72-3467

■ホームページ:
http://tosyokan.karatsucity.jp/hp/cnts_lib/index.html